

猿飛佐助

柴田鍊三郎

猿飛佐助

柴田鍊三郎



猿飛佐助

第六刷 昭和四十六年二月一日

定価 五五〇円

著者 柴田錬三郎

発行者 桜井文雄

発行所 広済堂出版

東京都新宿区下宮比町十五

番五号 モリサワビル3F

電話 (二六七) 二三六一

振替 東京一四一一四二番

印刷所 桜井広済堂

© 1970 柴田錬三郎

0093-000370-2230

猿飛佐助

装幀・さしえ 東啓三郎

猿飛佐助

一

天正十年三月十一日、武田勝頼は、天目山の麓の田野という村里の仮屋で、織田信忠の軍勢五千に包囲されて、屠腹し、ここに武田家は、滅びた。

——もはや、これまで！

と、覚悟した勝頼は、重臣某に、無言で頷いてみせた。

心得た重臣は、直ちに、不動明王の画像を描いた巨大な朱塗り太鼓を、摺り搏ちに、四十九打した。この太鼓は、戦国

武將中屈指の仏教信仰者であつた武田信玄が、曹洞禪に参じた際、信濃の竜雲寺の北高全祝から、贈られた家宝であつた。信玄は、北高全祝を来世首魁の師として崇敬していたので、常に、傍に据えて、おのが運を、その鼓音に託した。すなわち、出陣にあたって士気を鼓舞する際には七打し、戦勝を祝う時には十三打するといったあんばいに、またその打ちかたも遅速自在に変えるように定めていたのである。

そして、遺言の中にも、

「武田家が滅びる日には、摺り搏ちに四十九打せよ」

という一条を加えておいたのである。

その日が、ついに来たのである。

その一打一打に合せて、仮屋にめぐらした柵に、つぎつぎと、燃えるような緋色の幟が、立てられていった。

太鼓が鳴りおわった時、仮屋は、四十九本の赤い雲空にように、包まれた。

織田の軍勢も、これが、武田家の降旗と知っていたか、急に、矢弾を撃つのを止め、鯨波を絶った。

天地は、嘘のように、静寂に還った。

勝頼は、重臣に、

「妻は、いかがいたした？」

と、訊ねた。

重臣は、俯向いて、

「侍女二人の供にて、恵林寺へおもむかれました」と、こたえた。

勝頼の妻蘭溪は、曾て甲斐恵林寺の和尚快川に就いて参禅したことがある、快川は、信玄の請じた名僧で、後日、織田信長によつて寺院を焼かれるや、

「心頭を滅却すれば、火もまた涼し」

とうそぶいて、紅蓮舌になめられつつ、従容として示寂している。

勝頼は、妻が、その実家である小田原へ帰らずに、禅寺に行ったことに、微かな満足をおぼえた。

妻は、臨月の大きな腹をしていた。

——快川ならば、かくまって、生ませてくださいであらう。

勝頼は、妻が生むのが、必ず男子であり、それが、将来武田家を再興してくれるような予感がしていたのである。

かたわらに、今年十六歳の長子信勝が、坐っていたが、これは、病弱であり、気性も弱かったので、おのれに殉じせしめる肚であつた。

「では、逝こうか」

三十七歳の勝頼は、六十歳の老爺のようにのろのろとした動作で、短剣の鞘を払うと、

「信勝、父が作法に倣え」

と、言つた。

すると、生きた心地もない様子でいた信勝が、血の気のない顔面に、にわかに、懺怖の色をあふらせて、

「父上！ わ、わたくしは、死にたくありません……生かして下され！」

と口走つて、平伏した。

勝頼は、叱咤しようとして、信勝の項の、女のように白く細いのを一瞥すると、口をつぐんだ。

終日、書物をひもといていれば、それで満足している少年であつた。武将の子に生れたのがあやまっていたのである。

学者としては一流になり得る頭脳をそなえているに相違なかつた。

ふびんさに、当惑している勝頼を、じつと覗めていた重臣が、

「殿——」

と、呼んだ。

「それがしに、若をお救いするてだてがござる」

「あるか？」

勝頼は、思わず、迂愚な父親の表情になつた。

重臣は、胴にはさんでいた鉄製の呼子を把つて、口にした。鋭い金属音を合図に、影のように音もなく、一人の人物が入つて来た。

黒衣で全身をつつんでいたが、その左腕と右脚は、無かつ

た。黒光りする義手義足をつけていた。

「数年前よりやとい入れて居り申した忍者でござる。戸沢白雲齋と申し、秘術拔群なれば、若をお落し申上げるとは、さほど至難ではござるまい」

重臣とすれば、信勝のような臆病者を生きのびさせることに、なんの熱意もないので、口調は冷やかであった。

二

それから、半刻ののち、四十九本の赤旗が、同時に、音もなく、地べたへ倒れた。

「おう——武田勝頼の自刃がおわったぞ」

肅としてしずまりかえていた包囲陣は、にわかになどよめいて、どっと、柵をのりこえて、飯屋へ殺到した。

惨たる死の世界が、そこに、あった。

およそ二百名をかぞえる人々が、おのおのの座をきめて、武田家の面目を保つ見事な最期を示していた。

織田信忠は、勝頼の屍骸を検てから、ふと気がついて、

「信勝の死体がないぞ」

と、叫んだ。

奇怪なことだった。包囲陣を突破した者は一人もなかったし、さして広くもない飯屋はすでに隅々まで探索して、生き

た人間を一人も発見してはいなかった。

信勝という少年一人だけが、煙のように消えうせていたのである。

「もう一度、丹念に調べい！」

下知とともに、士卒は武具を鳴らして、再び八方に奔った。やがて、発見した生きものといえば、炭小屋に、藁束を縛にして、寝そべっているいつびきの大きな白犬であった。

ちょうど、母親のつとめをはたしたばかりで、小さな蠢くものを、その腹にすがらせていた。

どやどやとふみ込んで来た人間どもを警戒して、首を擡げると、ひくく唸った。

「ほほう、畜生のあさましさよ、主人が他界したと申すのに、六匹も生んで居るわ」

しかし、この平和な光景は、戦士たちの荒だった神経を、ふと、なごませる効果がなくなかった。

飯屋に火がつけられ、その煙が、この小屋にも這入って来はじめた時、白犬は、子犬どもをはねのけて、むっくりと起き上ると、おのが皮を剥いだ。

中から現われたのは、忍者戸沢白雲齋であった。

すばやく、藁束をはねのけると、穴底に据えた鎧櫃の蓋をはずして、死んだようにぐったりとなっている少年を、ひきずり出した。

ところである。

織田方にも、秘術を備えた一流忍者がいた。

地獄百鬼というその忍者は、織田信長が、自ら、木曾山中におもむいて、忍び谷とよばれる忍者部落から、面だましい秀れたのをえらんでやとい入れた一人であった。

忍者になるために生れて来たような若者であった。

無口で、無表情で、非情で残忍で、行動の大半を謎につつま、尋常の人ならばたすからぬほどの深傷を負うても、常のごとく振舞って、他人に気づかせぬ体力と忍耐力を持っていた。

百鬼は、本陣わきのくさむらに寝そべって、彼方の飯屋が、炎々として燃えあがるさまを眺めていたが、ひきあげて来た人々の会話を、陣幕の内にきくや、とたんに、すつと身を起していた。

武田信勝の姿が、煙のように消えていたこと。炭小屋の中に、子を生んだ犬いっぴきがいただけであったこと。

それだけきくと、百鬼の神経が、冴えたのである。

百鬼の姿は、そこから消えた。

次の日の午、戸沢白雲斎は、信勝をかるがると背負うて、木立のふかい天目山の急勾配の間道を、登っていた。

隻脚であり乍ら、黒い義足は生きているように動いて、そ

の速度は、普通人が走るのよりもまさっていた。

中腹の、やや平坦な地点へ達すると、頭上を掩う樹冠は、さらに濃くなり、春の陽はその上に眩しくかがやき乍ら、地上まで落ちて来ず、その昏さが、鳥の声もせぬ静寂を、ぶきみなものにしていた。

すたすたと行き過ぎようとした白雲斎は、ふと、その出足を停めた。

小花が散るように、まっ白い、小さなものが、面前に、ばらばらと、降って来たからである。

地面に落ちたそれを見れば、米粒であった。

それは、みるみる、ひとつの文字を、土の上に、書いた。

死

それであった。

白雲斎は、しかし、頭上を仰ぎもせず、すつと、二間ばかりあと退りしてから、信勝をせなから、おろした。

「この場所を動いてはなりませんまいぞ」

きびしく呟付けておいて、白雲斎は、ゆつくりと、大股に、「死」の上を、またぎこえた。

それから、腰に携っている革の小袋から、小さな珠をとり出すと、無造作に、宙へ投げた。

白煙がぱつと拡がった。そして、それは、若い女の美しい裸身が身もたえるように、ゆるやかにうねっていたが、やが

て、鮮やかに、ひとつの文字を描き出した。

生

と、読めた。

白雲斎は、空中から米粒を落して、地べたに、「死」という一文字を書く地獄百鬼という忍者のことを知っていて、これに対して、おのが特技をもって応えてみせたのである。

二間のむこうに、黒影が、湧くがごとく出現した。

白雲斎は、にやりとした。強敵と秘術を競うのは、ひさしぶりのことであった。

相手は、二歩ばかり進み出て、

「戸沢白雲斎——犬に化けて、武田の御曹子みんそうしを救うたとは、見事だ。この地獄百鬼が、御曹子の首をもらうぞ」

昂然うきげんと、うそぶいた。

白雲斎は、無言で、待つ。

百鬼は、さらに、二歩を迫った。

——これは、若い！

白雲斎は、百鬼が、まだ二十歳をこえて間もないのを、直感した。白雲斎は、すでに五十の坂をこえていた。

まともに闘つては、体力の消耗差によって、敵うべくもない。

不意に、白雲斎が、一喝した。

「何をおそれるぞ、百鬼！」

「なに?! おそれるとは！」

「飛翔の距離に来て、迷うとは、見苦し！ 血気ならば、飛べいっ！」

白雲斎は、老獪ろうがにも、百鬼が、飛翔の術を使うべく、四歩を進み乍ら、その地点で、ふっと、一瞬の迷いを生じたのを、看破したのである。

「ふん——」

百鬼も、さる者、誘発には乗らず、一瞬、右手を旋回させた。一条の綱が、掌の内から、飛び出して、矢のように、白雲斎めがけて、襲って来た。

ただの綱ではなく、数千本の針が、毬いぶのように、植えられている凶器であった。

狙うところは、頸である。ひと巻きに巻けば、無数の針が、頸を刺して、一刹那いちせつなにして、勝負は決る。白雲斎は、その義手で、無造作に、これを受けた。

針綱は、毒蛇のように、義手の手くびに巻きついて、百鬼の手もとから、びーん、と一直線に、張った。

百鬼は、渾身の力を罩めて、ひきしぼる。白雲斎は、ほんのしばし、そのおそろしい力に堪えていたが、

「……むっ！」

と、ひと息詰めざま、右半身にひねった。

瞬間——義手は、白雲斎の左肩から、すばっと、抜けて、

針綱にくると巻かれつつ、宙に躍った。意外、白雲斎の左腕は、煌たる白刃と化して、閃いた。すなわち、義手には、一尺五寸の剣が仕込んであったのである。

百鬼が、その義手を噛んだ針綱を、大きく、空に旋回させて、凄い唸りを生みつつ、飛ばして来るや、白雲斎は、この手剣で、これを両断した。

次の刹那には、おのれの方から、地を蹴って、五体を、宙のものにしていた。

しかも、地を蹴るや、義足を膝から抜きとばしていた。義足もまた二尺の剣を仕込んでいたのである。

先年、不運にして、隻腕隻脚となった白雲斎は、その片端を逆を利用して、これにつけた義手義足に、白刃をひそめたのである。

百鬼の頭上を翔けぬげざまに、手剣と足剣を、同時に、斬りあげせた白雲斎の迅業は、鬼神に似た――。

百鬼は、むざとは斬られず、腰の一刀を抜く手も見せずに払って、足剣を半ばから両断する秘術を見せたが、手剣に顔面を薙ぎ斬られるのを、躲すいとまはなかった。

白雲斎が、一間のむこうに降り立った時、百鬼は、大きく跳んで、距離をはなしていた。

「しまった！」

呻きを発したのは、白雲斎であった。

その場所を動くな、と命じておいたにも拘らず、信勝が、地面に書かれた「死」の一字を見る恐怖に堪えられずに、こちらへ走り寄ろうとしていたのである。

百鬼は、血まみれの顔面を、ぶるっとひと顫いさせるや、風のように、信勝の脇を、駆け抜け去った。

駆け抜けつつ、一風の刃音を鳴らした。

信勝の首は、宙に刎ねとんだが、百鬼が、躍りあがって、それを受けとめて、小脇にかかえ込む光景は、白昼夢のように、白雲斎の眼裏に、のこった。

百鬼は、右眼を喪った代りに、信勝の首を、首尾よくせしめたのであった。

白雲斎には、百鬼を追う体力はなかった。たとえあっても、胴をはなれた首を、とりかえすのは、無駄であった。

「わしも、老いた」

白雲斎は、手剣足剣を、義手、義足に納めて、歩き出し乍ら、呟いた。五年前ならば、空中から、百鬼の首を刎ねる秘術に、みじんの狂いもなかった筈である。

忍者が、老いをおぼえる。これほど、悲惨はなかった。

三

信勝の首級を地獄百鬼に奪われた白雲斎には、なお、もう

ひとつ、任務がのこっていた。

武田勝頼夫人を守護して、無事に出産させるように、重臣から、依頼されたのである。

勝頼夫人は、北条氏康の六女であった。勝頼に嫁したのは、天正五年、十五歳であった。すなわち、いまは、二十歳である。勝頼は再婚で、さきの妻は、織田信長の養女であったが、長子信勝を生むと間もなく病死していた。

北条氏政が、末妹を、勝頼に呉れたのは、関東へ伸びて来る上杉方の勢力を抑えるために、武田と同盟をむすぶ——いわば、政略のひとつであった。

しかし、夫人は、勝頼のこよなき伴侶となつて、嫁した翌年、勝頼が兄氏政と不和になり、公然と敵対するにおよんでも、妻は良人にしたがうものと、小田原からの帰国のすすめに応じなかつた。

戦国武将夫人として、亀鑑かみかんとなるべき女性じょせいの一人であった。

勝頼は、織田信忠に信州高遠城を陥落せしめられ、累代重恩の家臣たちから叛かれて、ついに、新府の城をもすてなければならなくなつた時、夫人に、小田原へ帰つて、もし男子が生れたならば、将来武田家を再興さいこうさせてくれ、とすすめてゐる。しかし、夫人は、それを肯ぜず、恵林寺へ行つてしまつたのである。

重臣は、白雲斎に、夫人をたのむ時、次のような、冷酷な

言葉を添えたのであつた。

「無事出産のあかつきは、夫人には、主君に殉じて頂く。夫人も、その覚悟であろうが、わが子の顔を視て、もし覚悟がにぶつたら、即座に、刺せ。……生れたのが、女子であつたならば、土民へ呉れてやつて、さしつかえはない。男子ならば、その方の手で育ててくれい。三歳になれば、その気象も判るであろう。もし、柔弱じょうじやく、小心であれば、育てるに及ばぬ斬りすてい」

白雲斎は、かしてまつて、受けたのである。白雲斎としては、臆病な信勝を救えなかつたのは、さして無念ではなかつた。

しかし、それから二日後、恵林寺に到着してみても、寺院方丈は焼き払われ、余燼よじんのくすぶつてゐる無慚な光景を目撃すると、肚の底から、憤怒した。

勝頼夫人は、気品たかい麗容のひとつだったのである。

白雲斎は、焼跡にふみ入つて、その死骸をさがした。

発見したのは、本堂須弥壇前とおぼしい場所に、結跏趺坐けつがふさして合掌した姿を崩さずに黒焦げた死骸だけであつた。

「心頭を滅却すれば、火もまた涼し」

とうそぶいて、示寂した快川和尚にまぎれもなかつた。ふしぎにも、坐つた場所二坪ばかりの床は、焼けのこつていた。白雲斎は、墓地の中を通じてゐる小径を辿ろうとして、と

ある新しい土を盛った墓の前の、一本の松の小枝につるされて、ひらひらと舞っている短冊を発見した。

黒髪の乱れたる世ぞはてしなき思ひに消ゆる露の玉の緒
夫人の辞世に相違なかつた。

この新墓は、自害した夫人のものなのだ。

白雲斎は、あの美しい白い肌が、焼かれずに、奥津城にねむったのを、せめてものなぐさめにした。白雲斎は、ただ一度だけ、遠くから、かい間視た夫人を、恋していたのである。忍者にあるまじき不覚であつたが、しかし、白雲斎は、おのれを責めるかわりに、おのれのような者まで魅惑する夫人の美しさをこの世ならぬ神秘なものと思いきめたことだつた。

墓前にぬかずいて、長い黙禱をささげてから、短冊を懐中にして歩き出したとたん、白雲斎は、

——待て！

率然と、胸中に、ひとつの光がさすのをおぼえた。

——奥方は、快川和尚のすすめによって、敵襲直前に、遁れ去つたのではないか？ 自害したといつたのではないのか！

「うむ！」

大きく合点するや、鋭い眼光を、視界へめぐらした。

——女の弱足では、遠方へはかくれまい！

忍者は、地形を観て、遁れる者がどの方角を、本能的にえらぶかを、正確に判断して、これを追う修練を積んでいる。白雲斎は、北へむかつて、飛鳥のごとく奔り出した。

——そして日が、昏れた。

十三夜の月が、山の端に昇った時、白雲斎は、とある山麓の杣道を、辿っていた。その足どりは、中風の翁のように、蹣跚うていた。白雲斎は、半日で、二十里を奔りめぐつたのである。二十里といつても、道の上の距離ではなかつた。溪谷の岩を越え、密林中の灌木をふみ拉いた距離であつた。

気力こそなお燠火のように燃えていたが、体力はすでに尽きていた。

義足を継いだ大腿の断面の疼痛だけでも、堪え難いほどであつた。

四

白雲斎が、左腕右脚を喪つたのは、すでに遠いむかしのことになる。これを斬つたのは、上泉伊勢守であつた。

光源院將軍（足利義輝）が、本願寺にたて籠つた時、白雲斎は、この首級を狙つて、忍び入つた。白雲斎にとつて、不運であつたのは、その夜、たまたまお目見えして軍監を賜わり、宿泊をゆるされていた上泉伊勢守が、目をさましたこと

であった。

決闘は、墨を流したような闇の中でなされたが、秘術を尽したのではなく、ただ一颯の刃音で、熄った。

すなわち。

闇に目の利く白雲斎は、長廊下をまっすぐに、奥へ進み入ろうとして、突如、二間のかなたに、人が立つのを見わけたのであった。しかし、当然、あびせかけられるであろう殺気をおぼえず、白雲斎は、一瞬、おのが目の錯覚ではないかと疑ったくらいであった。

對手は、そのまま、微動もなかった。

忍び入った白雲斎の方が、一喝したい衝動にかられたくらい、闇よりも濃く、暗黒の中に立った不動の姿は、もの静かであったのである。

不可解であったのは、白雲斎が、それまで、いくたびとなく闇の中で対峙した同業忍者の敵の、無息無臭の影とは、その静止相が、全く異質であったことである。後日、白雲斎は、年輪をくわえてから、あれは、おごそかな神前における自縛に似ていた、と思った。

ついに——この沈黙の対峙に堪えきれなくなったのは、白雲斎の若さであった。

廊下板をひと蹴りして、天井に、蜘蛛のように匍いつき、そこから、襲いかかった。

鋭い刃風の唸りの中で、白雲斎は、左腕と右脚が、同時に、両断される衝撃をおぼえ、廊下をころがるみにくいおのがからだの響きに、忍者の資格を喪う絶望をおぼえた。

「忍者ならば、二肢となつても、遁れるすべを知つて居ろ。去れ！」

もの静かなその声音をあびせられなければ、白雲斎は、そのまま、昏絶したに相違ない。

對手が、上泉伊勢守信綱であったと知ったのは、その人が將軍家より「兵法新陰軍法軍配天下第一」の高札を諸国にうち納めることをゆるされた、という噂を耳にした時であった。当座、白雲斎は、伊勢守に対して復讐の権化となろうと、血をたぎらせたものであった。義手義足に白刃を仕込んで、まことの手足にまさる働きを、工夫し、修練することに鬼となつたのも、復讐に燃えたあまりであった。

ついに、めぐり会う機会はなく、伊勢守は逝き、白雲斎も老いて、いまは、その傷痕が痛むばかりである。

——老猫すら、死期をさとれば、姿をくらまして、屍を、人目にふれさせぬ。まして、忍者が、老残を、陽の下にさらしてなろうか。

白雲斎は、蹣跚い乍ら、若い忍者に、信勝の首級を奪われ、いままた、半日を駆け通して、恋うるひとを捜しあてられぬ惨めさを、自嘲した。

と――。

白雲斎は、はっと、顔を擡げた。

女の呻きを、きいたのである。

尋常の呻きではなく、白雲斎に、異様な戦慄を与える悲痛を罩めていた。

頭をめぐるして、樹間をすかし視た白雲斎は、木樵小屋をみとめるや、次の瞬間、むささびが飛ぶに似た迅さで、奔った。

破れ戸を蹴破って、白雲斎が、見出した光景は、原始のまの淫靡図であつた。

全裸の女を、一瞥して山賊と知る男どもがむらがつて犯していた。

一人は、ひき裂かんばかりに拵げさせた下肢の中に大胡坐をかいていたし、二人が、左右から、胸の隆起をむさぼっていたし、四人目は、おのが股間を、女の顔にあてがつて、木の根瘤のような肉塊を、その口に押し込もうとしていた。

白雲斎は、意味をなさぬ凄じい叫びを迸らせた。

生涯の憤怒を、この一瞬に聚めた白雲斎の神速の跳躍は、山賊たちに、その場を動いとまさえも与えなかった。

手剣が、下肢を裂いた男の首を刎ねた。足剣が、口姦の男の背中を刺した。

そして、右手が、腰の一刀を鞘走らせて、乳房をむさぼつ

ていた二個の首を、一閃のもとに、胴から截つた。

そして――。

四つの屍骸を、はねのけた白雲斎は、血潮をあびて仰臥した白い裸像を、茫然と、見まもつた。

女は、勝頼夫人であつた。

おのれが、菩薩か女神のように神秘なものであるとして崇慕した美女が、斯くのごとく、無慚に、弄られた！

――あり得たことなのか！

白雲斎は、虚ろに呟いた。

なまなましく、ぶつくりと盛りあがつた臨月の腹部は、醜悪でさえあつた。けがされた陰部も、穢かつた。

ただ、薄明りの中に、仄かに浮いた細く通つた鼻梁が、白雲斎の知る高貴な氣品を、とどめているばかりであつた。

……はっと、白雲斎を、われにかえらせたのは、その大きな腹の山が、微かに動いたからであつた。

白雲斎は、いそいで、夫人の手を把つて、脈搏をかぞえ、まぶたを裏返して、瞳孔をしらべた。

「いかん！」

かぶりをふつた白雲斎は、なんのためらいもなく、手剣の切っ先を、その腹の山の頂きに、当てた。

肌は、ま二つに割れ、綿のような白い厚い脂肪が、めくれ上つて来た。白雲斎は、その中へ、右手をさし入れた。

弱々しい泣き声とともに、ひとつの生命が、この世に出た。
猿飛佐助が、これである。

五

十五年の星霜が移った。

天下は変わり、大和国葛城の金剛山の山中に庵をむすんだ忍者も、枯木のように老い果てた。

白雲斎が、葛城に、終の栖をさだめたのは、山頂に、役小角の作る法起菩薩・不動明王・蔵王権現の三尊をまつる金剛山寺があつたからである。

役小角は、修験道の偶像であつたが、また、忍者の守護神でもあつたのである。

役小角は、中華より渡つて来て、葛城山に住して、呪術を行なつていた。ある時、一言主神に、呪術をかけて、不動縛りにしてみせた。一言主神は、怨みをふくんで、文武帝に、讒して、

「役の優婆塞は、国家を傾けんと謀る」

と、言上した。

文武帝は、勅を下して、小角を召した。小角は、捕えられんとするや、忽然として空に騰つて、飛び去った。

官吏は計略をもうけて、その母を捕えた。

小角は、やむなく因われて、配所伊豆の大島に、遠流された。小角は、そこで、能く、鬼神を役使し、水を汲ませ、薪を樵らしめた、という。

役小角のごとく、呪術を使いたいという素朴な願望が、山伏と忍者に、嶺入りの修業をなさしめた、といえる。

白雲斎がむすんだ庵は、山伏が通る道すじを避けて、篠峯と葛城山との間の水越嶺の奥にあつた。

その眼下には、大和・河内往来の古道がうねっていた。楠木正成が、吉野へ往来した道である。

十五年——白雲斎は、勝頼夫人の腹を割って、とり出した子を、育てることに、専念して来た。

もとより、ただの養育ではなかつた。忍者とならしめるための苛酷な修業を、強いたのである。

満三歳になるまでは、自然に生い育つままにすておき、その誕生の日に、白雲斎は、飼いならした蝮を、足指に噛みつかせてみた。

幼児は、泣きもせず、蝮の胴をつかんで、ひき離そうとした。それが叶わずと知るや、木ぎれを把つて、ひと打ちくれた。蝮が、撥ねて、遁れ去るや、にこつとして、傷口を嘗めた。

それを眺めて、白雲斎の肚は、決つたのである。

佐助と名づけられた少年は、大きな丸い目と、両頬にえい

ばをもった、天性の愛嬌にめぐまれた貌（かま）たちであつた。ただ、悲惨な母の因果を背負うたごとく、背中に瘤（うぶ）を負うていた。

少年は、白雲斎が強い修業に堪えたのみならず、おどろくべき天稟（てんらい）をもって、ことごとく会得（くわとく）したのであつた。

成年に達した佐助に、白雲斎は、もはや、教えることは、何ひとつなかった。

この日々——白雲斎は、佐助に、ただひとつの任務を与えておいて、おのれは、たまに、陽のあるうち、庵（い）の上の巨巖の上に坐るほかは、終日、黙然と、炬端（きたん）ですごしているばかりであつた。

今日は、春風に誘われて、巨巖上に出ていた。白髪白髭の風貌は、古稀（こき）をこえたかとおぼしい。

義手義足は、疾（はや）くにはずして、歩行は、杖にたよっていた。

空は、晴れわたつて、わずかに、はるかな西海の上に、一斑（ひと）の綿雲をとどめているのみであつた。大和・河内・摂津の国々は、一望の内に在る。

陽が西に傾いた頃、白雲斎の半眼にほそめた眸子（めし）に、下方の古道をせつせと登つて来る佐助の姿が、映つた。

その懐中には、妊婦の陰毛を、持っている筈であつた。

「千石取り以上の武家屋敷に忍び入り、はじめて懐妊（かいにん）した奥方の陰毛を奪つて参れ」

一年前の春のある夜、白雲斎は、何気ない口調で、その命

じたのであつた。爾来（じこ）、佐助は、一夜も欠かさずに、山を降りて行き、すでに、百本以上を聚めて来ていた。

これは、生涯（じやうがい）に女人に接しなかつた白雲斎の、陰湿な復讐（ふしう）心が思ひついた変態的趣向であつたろうが、佐助に忍びの術を修練させるに、これ以上巧妙な手段はなかつた。

はじめて妊娠した若女房は、どこの家でも大切に扱われる。まして、千石取り以上の武家ともなれば、世嗣（よき）を期待するのであるから、周囲の神経が四六時中、その身に配られている。これを襲つて、陰毛を奪うのは、容易（やす）の業（わざ）ではない。

まず、いずこに、初妊婦がいるか、を探索するのさえも、嚴重な秘密主義の武家屋敷であれば、困難なのである。

わずか一年のうちに、百本以上を聚めたのは、おどろくべきことであつた。

実は、白雲斎は、二十歳の頃、これを為して、一年に三十本も聚め得なかつたのである。

しかし、白雲斎は、一言も、佐助をほめていなかった。

じつと、視線を投げていた白雲斎は、佐助が遊び仲間の小猿が、迎（むか）えに降りて来たのへ、何やら愉（たの）しげに、にこにここと話しかけるや、かつと双眸（めく）を鋭（と）きさま、かたわらの杖を把（にぎ）つて、びゅんと放つた。

「おっ！」

佐助は、ぱつと身を沈めて、飛矢のように唸（う）って来た杖を、